

幼稚園に通う外国にルーツをもつ幼児と保護者の実態と 支援内容について

－保護者と幼稚園教諭への質問紙調査から－

田中 寛美

愛知教育大学大学院教育学研究科 教育実践高度化専攻児童生徒発達支援コース 幼児教育実践系

Reality and Support for Children and Parents with Foreign Roots at Kindergarten: Survey for Parents and Kindergarten Teachers

Hiromi TANAKA

Graduate student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

I. 問題の所在と目的

平成2年の出入国管理及び難民認定法（いわゆる「入管法」）改正施行以後、筆者が居住する静岡県浜松市には、南米地域、特にブラジルからの外国人登録者が急増し、浜松市立小中学校に在籍する外国籍児童生徒の数は、令和2年5月1日現在で1,850人と過去最高である。その中で、日本語指導が必要である外国籍児童生徒は1,206人であり、日本国籍の児童生徒は202人いる。外国人児童生徒に対しては、個々の日本語習得状況に応じた、段階を踏んだ日本語・学習支援、支援者の配置・派遣が行われ、在籍学級で学習できるよう支援体制が構築されている。¹⁾

浜松市立幼稚園における外国にルーツをもつ幼児（両親もしくは親のどちらかが外国出身者である幼児、以下は「外国人幼児」と記載）への支援内容は、教育指導員の配置、通訳の派遣などもあるが手続きが煩雑であり、小中学校のような支援体制が構築されておらず、各園に委ねられている部分が多い。これは幼稚園が義務教育段階でないことが原因だと考えられる。²⁾

幼稚園教育要領は、「海外から帰国した幼児や生活に必要な日本語の習得に困難のある幼児の園生活への適応」として、幼児の実態に応じた計画的な指導について述べている。また、文部科学省からの指針でも、学齢期に近い外国人幼児への円滑な就学に向けての取り組みや就園機会の確保の推進について述べられている。³⁾ 外国人幼児の実態を把握し、自然に日本語や日本の生活習慣などに触れることができるよう配慮し、円滑な

就学に向けての支援が求められている。

一方、保育現場では、多国籍化や日本生まれ日本育ちの増加などに伴い、外国人幼児や外国人幼児の保護者（以下は「外国人保護者」と記載）の文化や言語、生活経験などに、個々により実態の違いが見られる。また、それにより、外国人保護者の日本で生活することへの意識や日本の生活様式への理解、子育て観なども多様化してきている。そのため、集団の中で一人一人の実態を理解し、思いに寄り添いながら適した支援を実施していく上で困難な場合がある。

そこで、外国人幼児と外国人保護者の現状と意識について、幼稚園教諭と外国人保護者の双方に意識調査を行い、外国人幼児と外国人保護者へのよりよい支援や支援体制を導き出したい。

II. 調査方法

1. 調査対象と調査時期

2020年11月から12月に、浜松市立幼稚園の外国人幼児が在籍する35園の外国人幼児と関わった経験がある教師と外国人保護者を対象に実施した。

2. 調査方法

調査用紙1（教師用）、調査用紙2（外国人保護者用）の質問紙を作成し、回答依頼をした。調査用紙2は、やさしい日本語、英語、ポルトガル語、スペイン語、タガログ語、中国語、ベトナム語の7言語で作成し、外国人保護者が回答できる言語を選べるようにした。

3. 調査内容

(1) 調査用紙1 (教師用)

- ・ 外国人幼児と外国人保護者との関わりの中で困ったこと
- ・ 外国人幼児と外国人保護者への支援内容
- ・ 外国人幼児と外国人保護者への必要と考える支援内容や印象に残っているエピソード

(2) 調査用紙2 (外国人保護者用)

- ・ 外国人幼児の実態 (年齢、国籍、言語、将来など)
- ・ 入園時期、入園理由、入園してよかったこと
- ・ 幼稚園で困っていること、幼稚園への要望
- ・ 就学への意識

4. 倫理的配慮

調査目的及び回答・分析時の園や個人の匿名性の保証を明示した上で自由回答とし、提出をもって承諾とした。

Ⅲ. 教師対象の調査結果と考察

1. 回答者の属性

外国人幼児が在籍する26園82名の教師から回答を得た(調査対象者91名、回収率90.1%、有効回答数82名)。回答者は園長・主任(学級担任以外)36.6%、学級担任・預かり担当63.4%である。

2. 外国人幼児との関わりの中で困ったこと

外国人幼児との関わりの中で困ったこととしては、「子どもが教師が話している内容を理解できない」81.7%、「子どもが話している言葉が分からない」72.0%、「子どもの国の文化が分からない」34.1%、

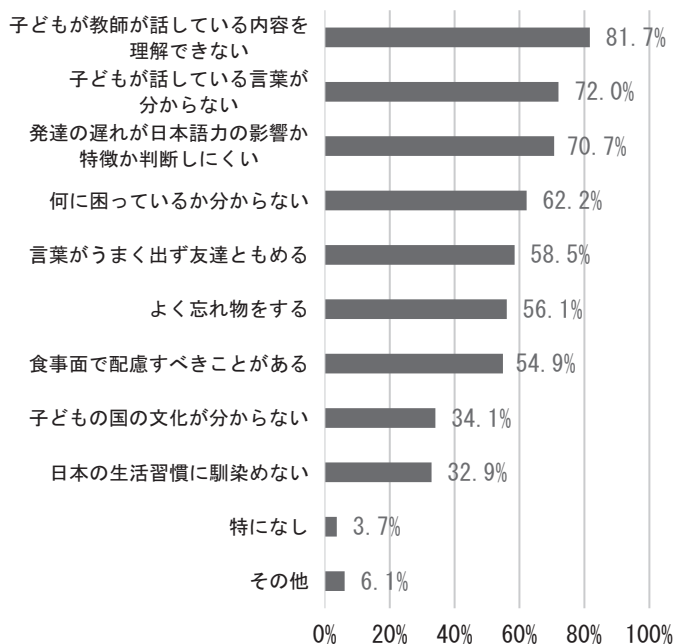


図1. 外国人幼児との関わりで困ったこと

72.0%、「発達の遅れが日本語力の影響か特徴か判断しにくい」70.7%が高い(図1)。「その他」では、「園に連絡なしで欠席する」「天候によって休む」「突然、国に帰る」「他児との関係づくり」などがあつた。

印象に残っているエピソードをあげてもらったところ、「泣いている理由が分からず、対応の難しさを感じた」「外国人幼児同士の会話が分からない」「外国人幼児同士の揉め事の時、理由が分からないままのことがあつた」「言語(日本語)力が不十分なため、間違つて理解したり、細かな気持ちの受け止めができにくかつたりした」「全く日本語が話せず、多動傾向で、友達と揉めることが絶えなかつた」などがあり、言語(日本語)による意思疎通に困っている状況であることが分かる。外国人幼児は母語が確立していない状況で第2言語の日本語も習得しなければいけない困難さがあるため、自分の思いを言葉でうまく伝えられず、叩く、押すなどのマイナス行動で表現してしまう時がある。それを理解し、「おもちゃを貸してほしい」「一緒に遊びたい気持ち」などを代弁したり、仲立ちしたりし、周りの友達との円滑なコミュニケーションの基盤づくりへの配慮に心掛けていく必要があるが、教師も言語面の困難さから十分な援助ができない状況であることが分かる。

また、「イスラム教圏の外国人幼児へは食事や行事の参加の可否等、宗教の理解や配慮が難しかった」と宗教に関することもあつた。宗教的な判断による禁忌はその国や地域、宗派的な理由から様々に異なり、保護者が判断するため、担任だけでなく教師間で連携して確認し、対応する必要がある。⁴⁾

3. 外国人幼児への支援内容

外国人幼児へ実施したことがある支援内容の中で効果的な支援としては、「視覚的教材を利用する」93.6%、「個別に簡単な日本語で話す」87.5%、「友達との関わりの中で仲裁役になる」81.6%が高い。「クラスの表示を日本語と外国人幼児の母語にする」「イラスト入りの母語の本を活用する」などの実践例もあつた(図2)。

「子どもが分かる言葉(母語など)で話す」は、効果的支援として48.7%であり、エピソード記述欄にも「安心できる言葉を母語で教えてもらう」「簡単な単語を母語で伝えた後、日本語で伝える」「日本語と母語の保育環境にし、互いの言語を理解できるようにした(保護者へも分かるよう、クラスだよりに取り入れた)」などがあげられており、日本語習得や園生活への安心感を得ることに繋がっていると考えられる。特に入園当初には効果的であるようだ。また、母語を生かせる遊びや発表会で母語の歌を取り入れ、外国人幼児の母語を知る機会をつくる実践例もあつた。

反面、「子どもが分かる言葉(母語など)で話す」こ

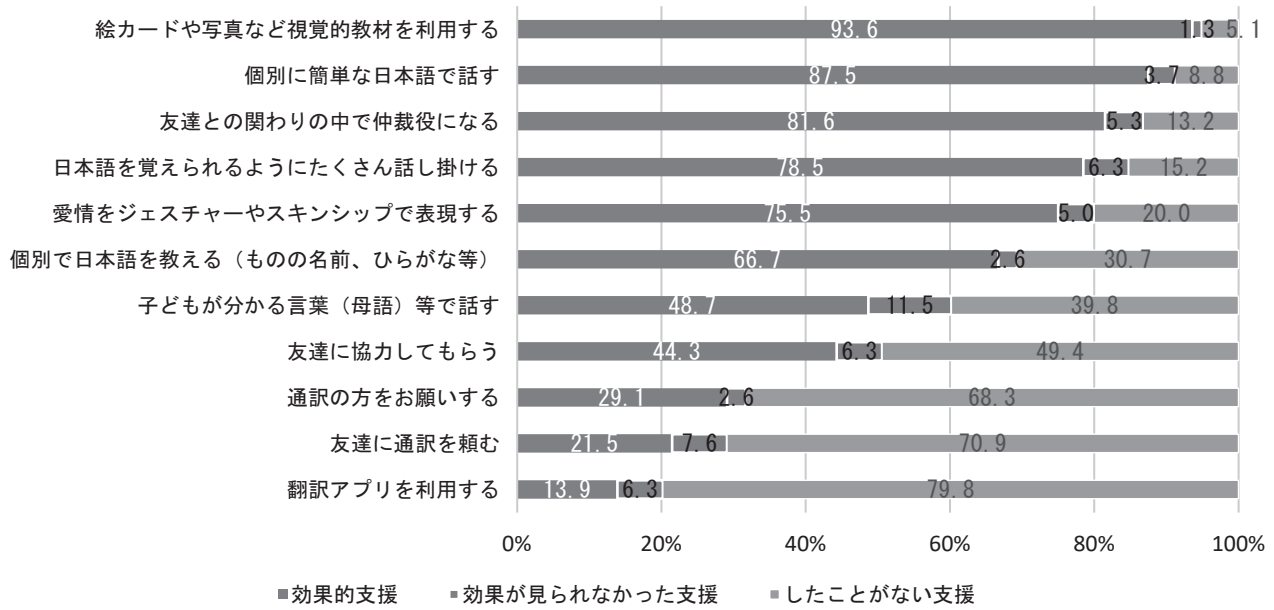


図2. 外国人幼児への支援内容

とは、効果がなかったとする回答も 11.5%あった。これは、多国籍化による多言語化、他言語の発音の困難さなどが原因ではないだろうか。また、「日本語の吸収が早く、教師が母語で伝えたが、『〇〇って、なに』と逆にその言葉の意味を日本語で質問された」というエピソードもあった。このように「効果がなかった」とする回答は、全体的に低いもののどの項目にも見られた。

以上により、入園当初の支援としては、日本語を習得し安心して過ごすことができるよう、視覚教材を利用したり、分かる言葉や簡単な日本語で関わったり、スキンシップを通して愛情表現をしたりするなどの細やかな支援により、園生活に馴染むことができるようになることが推測される。

また、「仲の良い友達の名前や好きなもの、必要とする言葉は自分から覚え、発言するのだと感じた」という記述からは、外国人幼児が自ら興味をもてる環境の重要性が分かる。「善悪の判断が難しく、『ダメダメ』を伝えることが多く、最初に覚えた言葉が『ダメダメ』であったが、『ダメダメ』を楽しそうに言いながら、判断が付けられるようになった」という記述からは、個に応じた繰り返しの長期的な支援が必要であることが分かる。

4. 外国人幼児の保護者との関わりの中で困ったこと

外国人保護者との関わりの中で困ったことは、「日本語が分からず伝えたいことを理解してもらえない」79.7%が高く、また「子どもの園での様子を伝えるが理解してもらえない」も 48.8%であった(図3)。エピソードには、「幼児間でのトラブルや幼児本人の困り感が保護者に間違った意味合いで伝わり、トラブルになることがあった」「支援が必要なことを理解してもらうことが難しい」などの記述もあった。友達と揉めたり困り感を感じたりする様子などは、遊びの経過過程、友達との関係性、お互いの思いなど、様々なことが関連し合い、行動として表れている。日本語が分からず伝えたいことを理解してもらえない状況の中、外国人保護者に園での様子を正確に理解してもらうことは難しいと推測される。

「提出物を出し忘れる」75.6%、「保護者が伝えたいことを理解してあげられない」73.2%も高く、提出物や時間に関しても、伝えられない、理解してもらえないもどかしさがあるようだ。

「その他」では、「緊急連絡がつきにくい」「孤立しやすい」「ものをなくす」「PTA活動に参加しない」「諸

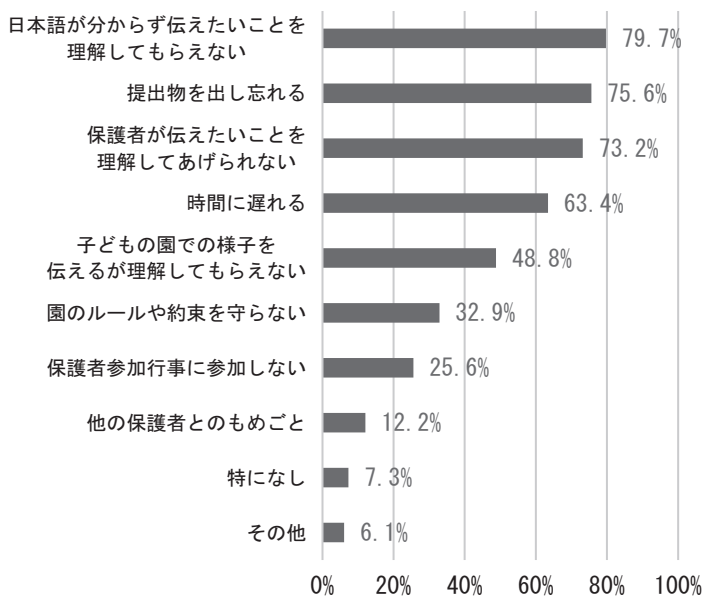


図3. 外国人幼児の保護者との関わりで困ったこと

経費の滞納」などがあった。「たよりについて個別に伝えることが多い」もあり、「副食費免除や施設等利用給付認定等、市への提出書類の内容が多く、一人一人の説明に時間を要する」ことから個別の支援の必要性や困難さを読み取ることができる。

「家庭訪問の時、国の料理を出された（接待が過剰）」
「虫歯が10本以上の子が殆どで、生活習慣面の支援の必要性を感じるが、保護者との温度差がある」「園で勉強を教えることを求める声があった」などの記述からは、文化や考え方の違いから生じる戸惑いや外国人保護者との連携の困難さを読み取ることができる。

5. 外国人幼児の保護者への支援内容

外国人保護者へ実施したことがある支援内容の中で効果的な支援は、「笑顔であいさつをする」95.1%、「重要なことを個別に伝える」93.6%、「話し掛ける機会をつくる」92.5%が高い(図4)。様々な方法で保護者と関わる機会をもち、好意的な教師の態度は安心感に繋がるのではないかと。

たよりについては、様々な工夫が見られ、「簡単な日本語にする」83.7%が最も実践され効果的であるが、保護者の日本語力に合ったものでないと効果的でないことが分かった。また、たよりを配布して終わりではなく、

身振り手振りや簡単な言葉を用いて個別に伝えることが、外国人保護者にとって、たよりの内容を正確に理解したり、保護者から分からないことを聞けるようになることに繋がったりすることが分かった。

通訳者と翻訳ツールは、活用した場合、効果性が高く、「翻訳アプリでは対応しきれない内容もあるため、通訳者を頼むことが1番の支援になる」とする記載からも分かるように、より正確に翻訳してくれる通訳者の必要性の方が高い。一方で、活用したことがない支援として50%以上あり、通訳依頼の煩雑さ、翻訳ツールの園用が未配備であることが原因と考えられる。

エピソードには「両親とも外国の方、どちらかが外国の方と外国人保護者の状況により、支援の効果性が異なる」「家庭訪問は難しかったので、個人面談を園で行った」「母親自身が来日したばかりで知り合いがいなく、とても不安な様子だったため、登園時、園児と関わり心が穏やかになってから帰ってもらうようにした」「両親とも外国出身で、入園式に普段着で来られたので、事前に写真を見せて説明すればよかった」「運動会のことを伝えたら、『Festival?』『BBQ, OK?』と聞かれ、ブラジル国籍の通訳の方の話からブラジルには運動会はないことを知った」などの記述があった。教師は外国人保護者の実態や文化、経験の違いを理解し、多様性を受け入

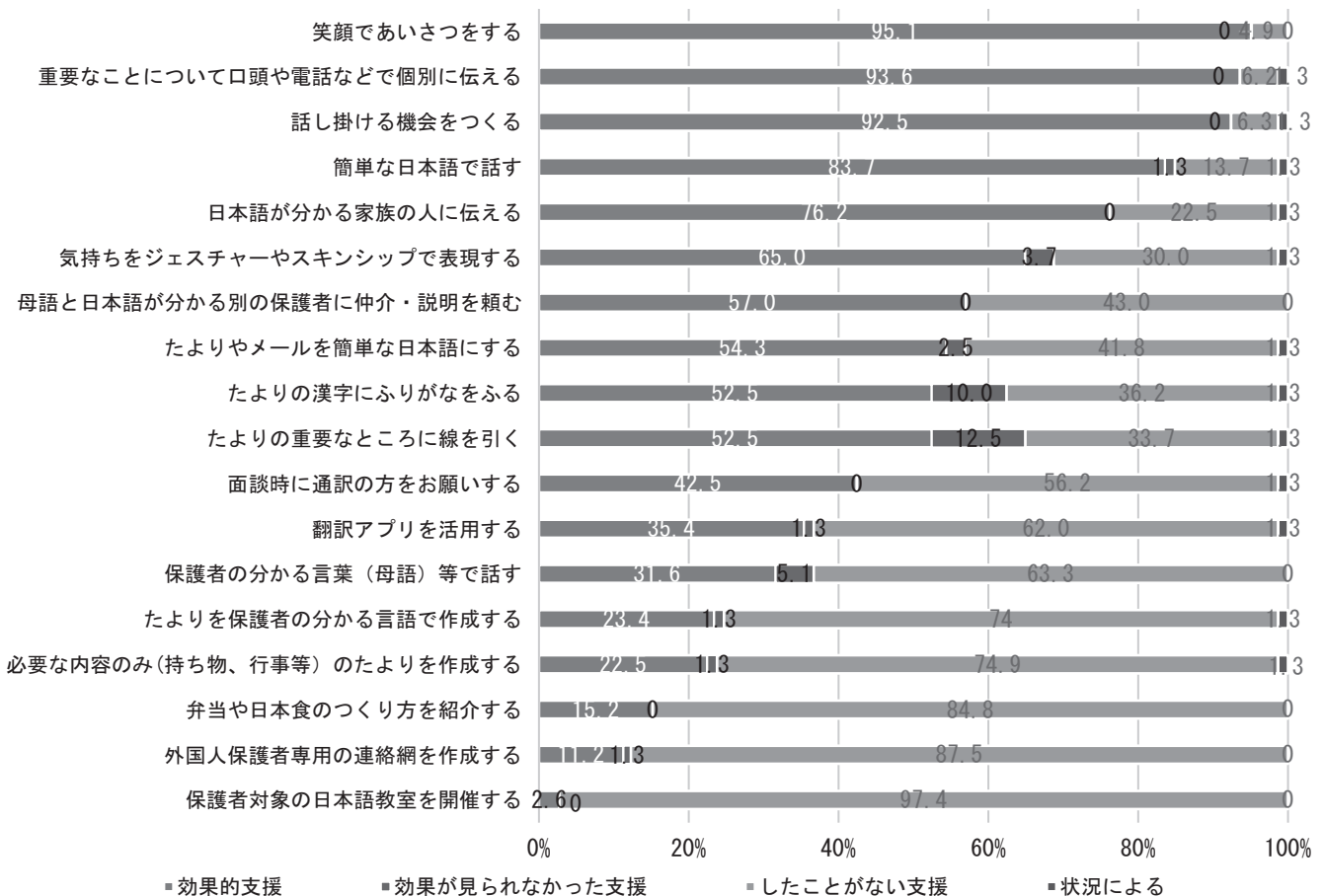


図4. 外国人幼児の保護者への支援内容

れ、柔軟的な対応が必要であると言える。

外国人保護者への日本語教室の紹介は、日本語面だけでなく、コミュニティーができ、喜ばれたことについて記述があり、母国とは異なる言語や文化などの中で同じように生活をする仲間との存在は、安心感につながるため、園や地域などで外国人保護者同士が関わりをもてる場があるとよいのではないかと。

「日本人保護者で海外滞在経験がある方は、不安な気持ちや不便さだけでなく、異国で生活する楽しさや面白さなど、いろいろな感情を共有でき、このような方との繋がりや人材確保ができるとよい。また、同じ立場である周りの保護者の理解や支えが、今後、日本で生活していく外国人保護者にとっては、本当の意味での日本語や日本文化の習得、継続的繋がりとなる」と自由記述での回答も見られた。園での支援は、子どもが園に在籍している限られた期間のため、継続的な支援を行っていくには、周りの保護者との連携が、就学後にも繋がる効果的な関係であると考えられる。保護者同士が接する機会を多く作り、幼稚園在園中によい信頼関係を築くことができるように支援するとよいのではないだろうか。また、自由記述に見られた「就学前に集団生活の楽しさを幼児自身が感じ取り、このような子どもの様子から、保護者が教育施設と良好な関係を築けるようにする」ことも、就学前教育の場である幼稚園の役割の1つであると考えられる。

6. 必要と考える支援内容と課題

(1) 必要とされる支援内容

自由記述より必要と考える支援をまとめると以下の通りである。

- ①区役所や保健師、教育委員会との連携
出生時からの継続的な支援、保護者支援、生活保護家庭の対応など
- ②多言語による入園ガイダンス
日本文化やマナー、市立幼稚園の説明など
- ③通訳者の巡回派遣
たより翻訳や説明、子どもと保護者との会話の通訳、不在時の電話相談など
- ④翻訳ツールの整備
園用配備、たよりの多言語変換、子ども及び保護者との会話時に使用、使用説明研修の実施など
- ⑤外国人幼児と外国人保護者に関する研修、情報共有の場の設定
効果的な教材、多文化理解、就学後の実態など
- ⑥園生活に必要な言語冊子
多言語で教師・保護者用を作成
- ⑦外国人幼児の個別支援
絵本の読み聞かせや簡単な言葉のやりとり、園生活

の約束、保護者参加もあり

- ⑧多言語絵本の貸出
多文化理解の推進

(2) 教師の意識と課題

外国人幼児と保護者の支援に関する自由記述に43名のエピソードがあり、上記で紹介していないものを大きく3つに分け、以下にまとめた。

①多文化教育の推進

- ・「親しくなると人懐っこくなる、スキンシップが上手」
- ・「いろいろな国の子ども達と幼児期から関わることで、外国籍の子ともすぐに仲良くなったり、楽しい時の感情表現が豊かになったり、子どもなりに関わり方を学んだり、日本人の子ども達にとっても園生活を送ることの良さを感じている」
- ・「支援の難しさを感じつつも、自分自身も学んだり、子ども同士も育ち合ったりすることができ、とてもよい経験となっている」
- ・「外国人幼児をきっかけに周りの子にもいろいろな子がいるから、みんなで支え合っていこうという雰囲気づくりができるとよい」
- ・「職員が他国の文化を理解し、『〇〇人だから～』という考えを改めるべき」

多文化教育は、「社会的マイノリティの権利を保障する教育であるとともに、現代の多元的な民主主義社会を生きるために不可欠な知識・態度・技能を育てる市民育成の教育」⁵⁾と言え、外国人幼児と日本人幼児がいる環境は、異なる習慣や行動様式をもった他の幼児と関わり、それを認め合う貴重な経験の場である⁶⁾と言えるだろう。

②外国人保護者理解

- ・「園としては、『もっとこうしてほしい』という希望はあるが、まずは、毎日、登園できるよう、『送ってきてくれてありがとう』と労う」
- ・「日本人の保護者と同じように子育てに悩み、慣れない文化・言語の中、不安などがあるが、気軽に話を聞いてあげられない」 など

外国人保護者にとって、生まれ育った国とは異なる文化の国で子育てをすることは、不安やストレスを感じることはばかりであるのではないかと。教師がお互いの文化を尊重し、思いに寄り添うことは、外国人保護者のお互いの文化の尊重や日本での生活への安心感に繋がるのではないかと。

③外国人幼児受入れへの戸惑いや今後の課題

- ・「『自分の国の文化を知ってほしい』と言われたことがある。寄り添う気持ちはあるが、日本の学校に入られて、進学する気持ちはあるなら、時間を守る、約束

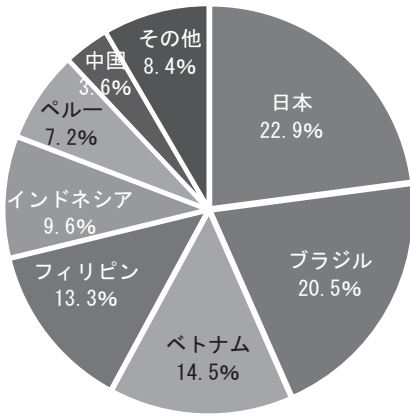


図5. 幼児の国籍

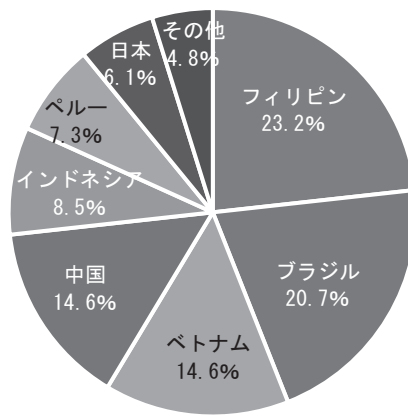


図6. 母親の国籍

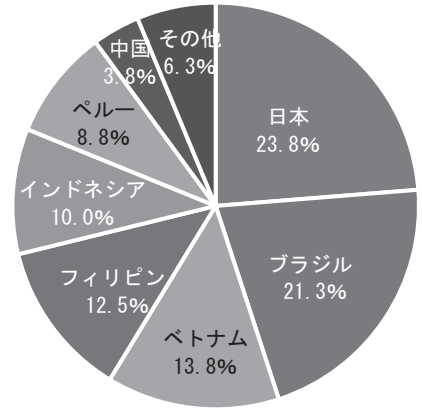


図7. 父親の国籍

を守る等の意識をもってほしい」

- ・「できる限り分かりやすくとは思うが、今後も日本で生活してもらう以上、簡単な日本語や生活の仕方を知ることが大事であるため、どこまで支援したらよいか悩む」
- ・「年々、外国籍の子の入園が増えてきており、言葉だけでなく発達や養育面、保護者の日本語理解への対応が難しく、支援をしていく上での行き詰まりを感じる」
- ・「年々、人数が増え、多国籍化しているので、支援の仕方も多様化し、職務の負担が大きく大変である」
外国人幼児と保護者への理解や支援への戸惑いから、様々な意見や考えがあることが分かった。厳しい意見もあるが、今後を見通した外国人幼児と保護者を心配する気持ちから生じているとも言える。円滑な受け入れや支援のために、早急な支援体制の構築が必要であると考える。

IV. 外国人保護者対象の調査結果と考察

1. 回答者の背景

外国人幼児が在籍する22園83名の保護者から質問紙調査の回答を得ることができた(母親81.9%、父親18.1%)。

回答した対象幼児は、3歳児16.2%、4歳児30.0%、5歳児53.8%の割合で、71.1%が3歳児から入園している。

幼児の国籍は、①日本22.9%、②ブラジル20.5%、③ベトナム14.5%、④フィリピン13.3%、⑤インドネシア9.6%、⑥ペルー7.2%、⑦中国3.6%であり、他にネパール、バングラデシュ、タイと多国籍であることが分かる(図5)。また、両親のどちらの国籍にするか決まっていない幼児も4.8%あった。

母親の国籍は、①フィリピン23.2%、②ブラジル

20.7%、③ベトナム14.6%、⑤中国14.6%、⑥インドネシア8.5%、⑦ペルー7.3%、⑧日本6.1%で、他にバングラデシュ、ネパール、タイと11か国である(図6)。

父親の国籍は、①日本23.8%、②ブラジル21.3%、③ベトナム13.8%、④フィリピン12.5%、⑤インドネシア10.0%、⑥ペルー8.8%、⑦中国3.8%で、他にバングラデシュ、ネパール、ボリビア、インドと11か国である(図7)。

出生地は日本71.1%、親の国28.9%で、日本生まれの方が多く分かる。

家庭での使用言語は、日本語のみが18.3%、日本語+母語が50.0%、母語のみが31.7%である(図8)。使用言語は、日本語、英語、ポルトガル語、フィリピン語(タガログ語、フィリピン)、ベトナム語、スペイン語、インドネシア語、バングラデシュ語、中国語、タイ語、ネパール語、ビサヤ語(フィリピン)の12言語である。両親が日本以外の異なる国籍の家庭で日本語のみが1.2%あった。2種類以上の他言語を使用している家庭は15.8%で、その殆どがフィリピン出身者である。フィリピン出身者の場合は、フィリピンの国語がフィリピン語で、公用語がフィリピン語及び英語であり、80前後の言語があること⁷⁾が理由であると推測される。

以上の結果から、家庭では日本語以外の言語を含む環境で生活している外国人幼児が殆どである。また、家庭内で言語コードスイッチングが生じている、2言語以上を混用

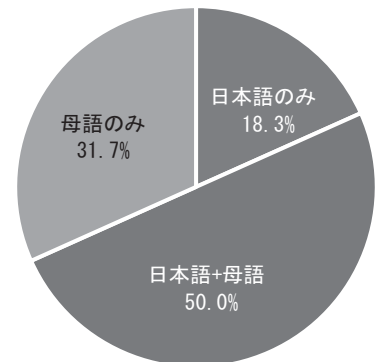


図8. 家庭内での使用言語

している状況であることが推測される。

2. 幼稚園に対する意識

(1) 入園理由と入園してよかったこと

幼稚園を知った方法は、「区役所・保健師」34.9%が最も高い(図9)。「その他」では、「親戚」「会社の人」「近所」「自分で調べた」「自治会」「園児を見かけた」などがあった。

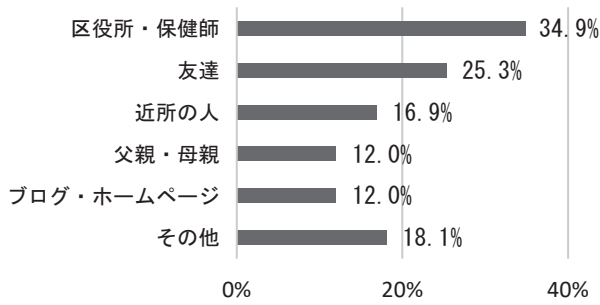


図9. 幼稚園を知った方法

入園理由としては、「日本の生活習慣に慣れてほしい」67.5%、「日本語を覚えてほしい」66.3%、「日本文化を知ってほしい」60.2%、「家に近い」54.2%が高い。人との関わりに関する項目は「友達をつくってほしい」54.2%、「同じ小学校に行く子が多い」30.1%である(図10)。円滑な日本の小学校入学を考え、日本語、日本文化、生活習慣に慣れることを願っていることが推測さ

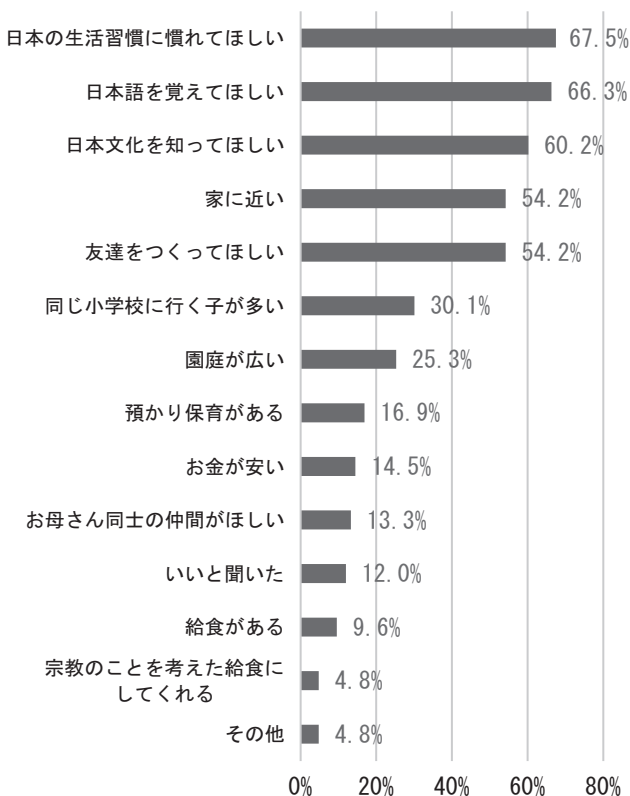


図10. 入園理由

れる。「その他」では、「会社の近く」「母語を話せる人がいる」があった。

入園してよかったことは、「日本語を覚えた」75.9%、「友達ができた」74.7%、「日本の生活習慣に慣れた」73.5%、「外でたくさん遊べる」56.6%などと子どもから入園した良さを感じ、「子育てのことを教えてくれる」34.9%も保護者として良さを感じていることが分かった(図11)。全回答者からよかったことの回答があった。以上の結果から、入園理由で高い項目と同様のものが多く、期待に応えられていることが分かる。

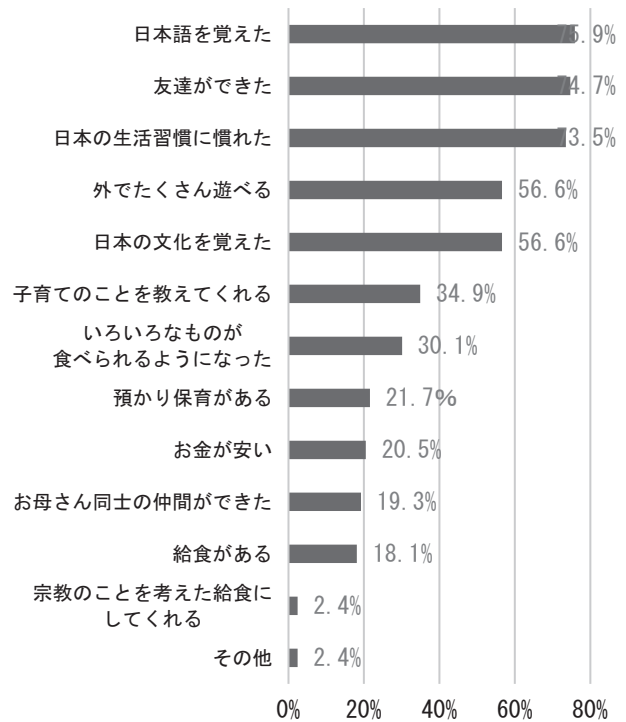


図11. 入園してよかったこと

(2) 幼稚園への要望

困っていることは「特になし」47.0%が最も高い(図12)。愛情をもって子どもの思いに寄り添ったり、様々

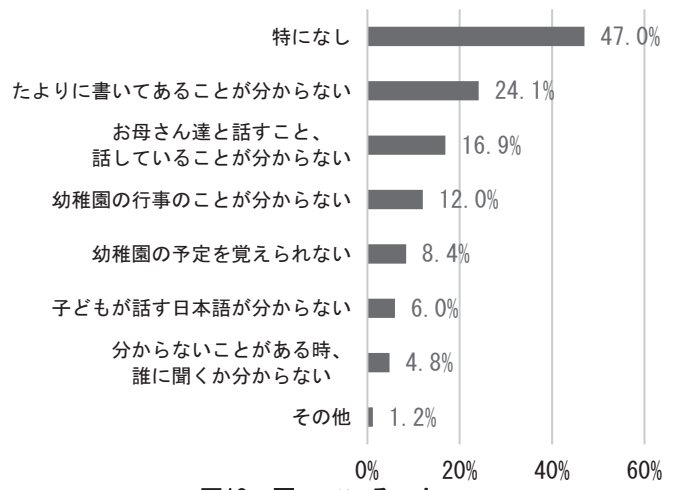


図12. 困っていること

な方法で保護者と関わる機会をもったりする教師の日頃の努力や、外国人保護者自身が日本生まれ日本育ち、もしくは日本の園や学校での生活経験があること、第1子以降の子どもが在籍していることなどがこの回答の背景にあると推測される。

具体的に困っていることとしては、「たよりの内容理解」と「他の保護者との会話を通しての関わり」に関する項目が挙げられた。日本語力に関する項目に困り感を感じている外国人保護者がいることが分かる。たよりに関しては24.1%であるが、翻訳ツールを利用し、母語に変換して内容を理解していることが推測される。「その他」は、「仕事をしていて、他の保護者と関わりがもてない」であった。

幼稚園への要望は、「子どもに日本語を教えてほしい」41.0%が最も高く、次に「特になし」33.7%である。たよりに関しては、「分かりやすくしてほしい」27.7%である(図13)。通訳者の要望に関しては15.7%で低いが、日本語が分かる保護者や身内、知り合いに通訳してもらっている現状はある。「その他」は、「お互いの文化を受け入れるようにする」「ホームページの園紹介の写真を増やし、分かりやすくする」「園での様子を教えてほしい」であった。

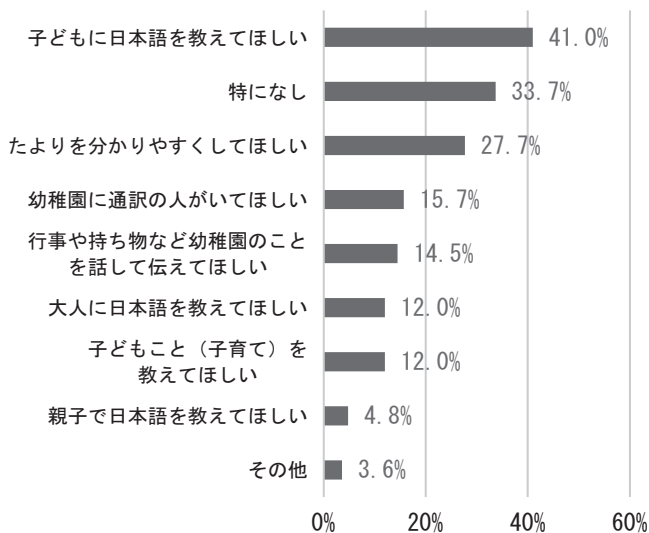


図13. 幼稚園への要望

他の外国人保護者に日本の幼稚園への入園を勧めるかについては、「はい」86.7%、「いいえ」13.3%である。以上のことから、外国人保護者は、幼稚園の支援に満足している方が多いことが推測される。

3. 就学に関すること

(1) 就学先

就学先は、「日本の小学校」92.8%、「まだ分からない」

2.4%、「帰国する」1.2%、「無回答」3.6%であり、日本の小学校への円滑な就学への意識から日本の幼稚園に入園していることが推測される(図14)。

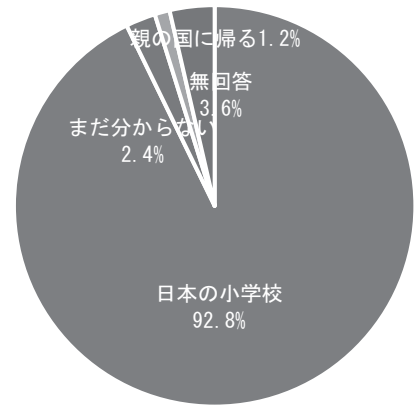


図14. 就学先

(2) 就学に当たって心配なこと

心配なことは、「いじめられるか」61.1%で最も高い(図15)。浜松市による調査での同様の質問に対して、「いじめられないか心配」の質問に対し、152人中82人(53.9%)が回答し、「社会的平等があるとよい。いじめをなくしてほしい」と自由記述があるとよい支援について述べられていた。⁸⁾また、大谷⁹⁾は、「日本にいる外国につながる子どもたちのほとんどは、いじめられた体験をもっている」と述べている。いじめは、日本人においても心配な問題であるが、外国人においては、より深刻な問題であると捉えられる。多様性の尊重や多文化理解が関係してくることであり、子どもの身近な存在である教師や保護者などが、理解を深め、態度で示すことが重要ではないか。

学習と日本語に関わる項目では、「勉強が分かるか」31.3%、「子どもが日本語が分からない」24.1%である。「生活言語能力」である日常会話の力は、ある程度は、普段の生活の中で自然に身に付くが、小学校ではそれに加えて、学習で求められる力である「学習言語能力」

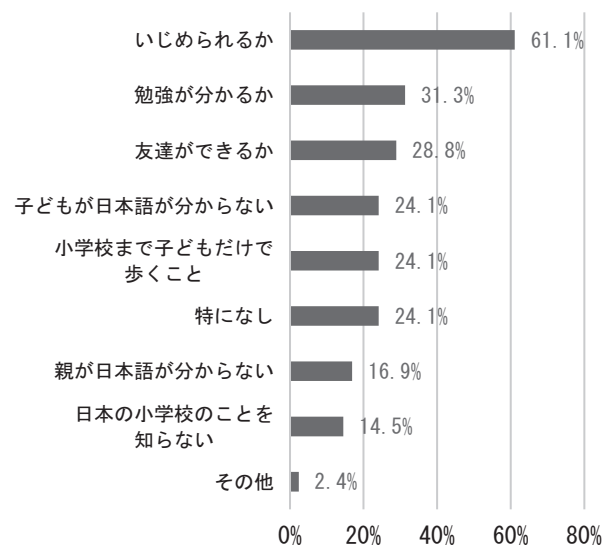


図15. 小学校で心配なこと

の習得も必要になる。「学習言語能力」は、教科などの学習場面で求められる情報を入手・処理し、それを分析・考察した結果を伝えるような思考を支える言語の力である。¹⁰⁾ 今回の調査ではこれらの項目が3割以下と低かったが、学習言語能力の問題に対し、外国人保護者は、「日本語で日常会話ができる＝日本語で学習できる」と捉えている可能性があるのではないかと考えられる。

「小学校まで子どもだけで歩くこと」は24.1%であり、日本では徒歩通学が当たり前のことであるが、国によっては保護者が学校まで送迎する習慣があり、心配していると考えられる。

「その他」は、「PTA役員」「友達と話ができるか」であった。

V. 総合考察

今回、教師と外国人保護者への質問紙調査を同時に実施したことにより、多くの外国人保護者は幼稚園の支援に満足を感じている一方で、困ったことに対する幼稚園教諭と外国人保護者との意識の違いがあることが分かった。教師は、日本人保護者と同様に、幼稚園での子どもの遊びの様子や成長している姿などを伝えたい思いがあるが、外国人保護者にその思いが伝わっていない、伝えることができないもどかしさがあるようだ。教師の自由記述からは、「子どもは他の子と変わらず、信頼関係を築き、愛情をもって接することが1番」「相手の立場で考え、寄り添えるようにしたい」と意識をもち、「言葉が通じないため、オーバーリアクションでよい行動を認めた」など、教師は身振り手振りなどをしながら言葉で伝える努力をしている。しかし、「外国人保護者の不安な気持ちに気付くことができなかった」など、言語（日本語）での意思疎通や相互理解のための支援方法の工夫に課題を感じていることが明らかになった。これに対し外国人保護者は、「たよりの内容理解」と「保護者同士の会話」に関する項目を挙げているが、数値は高くない。むしろ、就学後にいじめられることや子どもの日本語力を心配している。

以上の問題解決の手立てとしては、①言語（日本語）支援、②多文化理解および園内外の支援体制の推進が必要であると考えられる。

①言語（日本語）支援

通訳者の巡回派遣においては、通訳者の保育への理解や継続性など、円滑なコミュニケーションのためのよりよい支援の導入に向けて検討が必要である。翻訳ツールは園用のものを配備し、外国人幼児や保護者との会話時やたより作成時などに多言語で対応できるような環境を整備する必要がある。

「子どもに日本語を教えてほしい」という外国人保護

者からの要望もあり、外国人幼児への日本語指導も必要である。幼稚園生活を通して、次第に身に付いていくことが考えられるが、教師の指示を他の幼児の行動や教師の身振り手振りを手がかりに理解し、日本語自体の理解が不十分な状態であることも考えられる。そのため、生活言語に加えて、学習言語の習得も不十分となり、小学校以降の学習場面で言語を使って思考を進めることができず、学習につまずく可能性がある。教え込みではなく、遊びや多様な体験を通して多様な日本語に触れ、親しみ、小学校以降も含めた長期的な発達を見通した幼児期にふさわしい日本語教育を行うこと¹¹⁾に向けて、検討し実践していくことが必要である。

また、家庭での使用言語が日本語ではない場合、子どもが日本語しか理解できなくなると、保護者との相互理解が難しくなったり、このことによって子どもが保護者を軽視したりして、家庭での教育が難しくなることが考えられる。日本で生活するためには、日本語の習得は不可欠ではあるが、教師は、母語の習得も肯定的で積極的な自己意識の発達や、文化的アイデンティティの形成に重要な意味をもっていることを理解し、外国人保護者と話し合う必要があるだろう。¹²⁾

②多文化理解及び園内外の支援体制の推進

外国人幼児と保護者の姿や、幼児の発達状況の背景に、言語（日本語）面や経験、文化の違い、多国籍化、日本生まれ日本育ちの増加などが影響し、多様化、複雑化していることが推測される。教師が外国人幼児や保護者に対し、さらに理解を深めるためには、多文化や外国人幼児の発達等に関する園内外の研修が必要であると考えられる。

外国人幼児を受け入れるための園内体制を整備するには、教師間の連携は不可欠であるが、園外の専門機関との協働体制の構築も重要である。¹³⁾ 発達や養育面での課題については園での判断が難しいため、療育施設や教育委員会、区役所など、外部の専門機関との連携が必要である。浜松市教育委員会は、小・中学生を対象にNPOに業務委託をし、母国語支援、日本語・学習支援を実施している。¹⁴⁾ 長期的で円滑な支援を考えた場合、浜松市立幼稚園においても協力体制を構築し、専門機関と連携した母語や日本語（外国人保護者を含む）への支援が実施できるとよいのではないかと考えられる。

以上の点を今後の課題として、外国人幼児と保護者、幼稚園教諭を主とした支援に携わる方々のために研究および実践を深めていきたい。

引用文献

- 1) 浜松市教育委員会（2020）「外国人子ども教育推進事業」説明資料 1, 8-9
- 2) 二井紀美子（2020）「外国人幼児等に対する国の施

策の変化と課題」日本乳幼児教育学会第30回大会研究発表論文集 178-179

- 3) 文部科学省 (2020) 「外国人の子供の就学促進及び就学状況の把握等に関する指針」
- 4) 文部科学省 (2019) 「外国人児童生徒受入れの手引き 改訂版」明石書店 7
- 5) 日浦直美(2016) 「保育講座5 保育を支えるネットワーカー支援と連携」東京大学出版会 220
- 6) 文部科学省 (2020) 「外国人幼児等の受入れにおける配慮について」 17
- 7) 外務省「フィリピン共和国 基礎データ」(令和3年2月27日最終閲覧)
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/philippines/data.html#section1>
- 8) 浜松市、受託：公益財団法人浜松市国際交流協会 (2018) 「外国にルーツを持つ就学前の子どもと保護者の子育て支援に関わる調査報告書」 25
- 9) 大谷千晴 (2017) 「外国人子ども白書ー権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の視点から」 明石書店 209
- 10) 前掲 (3) 25
- 11) 前掲 (6) 23-24
- 12) 前掲 (5) 227-229
- 13) 前掲 (6) 27
- 14) 前掲 (1) 10-11

謝辞

本調査研究に御協力いただきました浜松市立幼稚園の幼稚園教諭ならびに外国人保護者の方々に心より御礼を申し上げます。